



耐震改修工事後の農学部建物正面

松涛

No.28

2012. 3. 10

主な記事

学部長挨拶	2
同窓会長挨拶	3
今年度の活動計画	3
退職者あいさつ	4
支部だより	6
職場紹介 新潟県農業総合研究所食品研究センター	9
特集 東日本大震災の復興に取り組む	10
同窓会の新潟県支部結成会を開催	13
ペンリレー 同窓生からのたより	13
農学部フォーラム	15
国際交流	15
同窓会会計報告	16
学部だより	17

同窓会長挨拶

同窓会長 進藤 隆



今年度は、3月の東北大地震、新潟・長野県境地震、24年1月からの寒波と大雪、日本列島は地震と気象災害に苦しめられた1年でしたが会員の皆様におかれましては、ご健勝のことと拝察いたします。

昨年来準備してきました同窓会新潟県支部発足懇親会を1月28日にホテルオークラ新潟で86名が参加して盛会裡に行うことができました。会員への十分な周知がなされなかったのではないかと反省もありました。が渡辺仁新潟県支部長を中心とします発展されることを祈念いたします。

母校の耐震・大規模改修は東日本大震災の影響で残されたC棟の工事予算が付かず実施されませんでした。が、平成24年度予算で実施されるそうので一日も早く整備された環境で後輩が学習できることを願っています。

農学部部の校舎の耐震・大規模改修に伴う「嵐丘庭」と「前庭」の復元整備について、昨年同窓会創立60周年記念事業を視野に入れるのが最適ではないかと、提言してありますが、60周年記念事業として提言どお

り実施いたします。

なお、60周年は平成24年ですが準備が遅れておりますので平成25年に実施します。早急に実行委員会をスタートさせますので会員諸兄の絶大なご協力をお願いします。60周年記念事業の概要を、新潟県支部発足懇親会で次のように説明しましたが、5月の常任幹事会で承認された第詳細を決め趣意書で会員諸兄へのお知らせとお願いをいたします。

〔記念事業〕

- 1 事業募金
平成24年から平成25年3月募金額は、事業内容によって決める。
 - 2 記念講演会・式典
 - ① 期日 平成25年6月8日(土)
 - ② 会場 ホテルオークラ新潟
 - ③ 講師 同窓生・農学部教官で検討中
 - 3 50周年記念式典には、300余名の皆様からご参加をいただきました。
- 60周年記念では、より多くの参加を期待しております。是非、記念式典に合わせて、同期会、同級会、恩師を囲んでの研究室親睦会等を準備いただき、一人でも多くの方が参加くださるようお願いいたします。
- 3 記念事業

- (1) 農学部キャンパスの環境整備
耐震・大規模改修に伴う「嵐丘庭」と「前庭」の復元整備
 - (2) 記念誌「松濤」復刻版の刊行
「松濤」の前に「同窓会報」が昭和31年より昭和49年19号まで発行されていますが、同窓会事務局では保管されていません。保存している方は事務局にご一報ください。
 - (3) 記念碑の建立
旧河渡キャンパス地内(現新潟県立新潟東高等学校)に建立
 - (4) 検討事項
 - ① 「農学部学生歌・四季の新潟」のCD作成
 - ② 記念式典当日の「ホームカミング」
- 60周年記念が同窓会員相互の交流と親睦、母校の益々の発展と充実が図れるよう役員と共に努力します。一層のご支援とご協力をお願いいたします。会員の皆様の益々のご健勝とご発展を祈念し、会長の挨拶とさせていただきます。

2011年度活動計画

幹事長 箕口秀夫

- 農学部同窓会活動の活性化に努めていきます。また、全学同窓会にもこれまで通り協力していきます。
- 2011年度は、主として以下の活動に取り組みます。
- 1、「松濤」28号の発刊
充実した内容を企画して読まれる会誌を目指します。
 - 2、同窓会ホームページの維持
新しい情報をお届けできるよう更新に努めます。
 - 3、支部活動の支援
各支部の活動をより一層支援します。
 - 4、新潟県支部設立に向け活動を開始します。
 - 5、学部前庭等整備への協力
中庭(嵐丘庭)の整備は講義棟の改修終了後になります。他の改修工事が進行し、学部前庭や玄関ホール
 - 6、学内諸行事への支援
「卒業祝賀会」を支援します。また、退職者に記念品の贈呈を行います。
 - 7、農学部や各学科が行う学術・文化活動を支援します。
 - 8、受験者増加への取組みに対する支援
「高等学校での出前講義」や「高等学校での説明会」に行くための旅費の支援を行います。
 - 9、全学同窓会への協力
運営委員会への参加、カード入会事業の協力、大学との懇談会や全学交流会への参加、機関誌「雪華」の発送など他学部同窓会と足並みを揃えた活動を行います。

農学部を去るにあたって



明日の風

有田 博之

(生産環境科学科)

昨秋の末頃から退職後のことを聞かれることが多くなった。しかし、今に至っても不思議なくらいにイメージが湧かない。規則的な日常性が義務づけられる立場から、拘束のない自由な身になったときの自分を想像できないのである。どうも、そうしたことを想像する能力を私は欠いている。思い返せば、仕事に携わって以降、現在進行形で自分を見てはいたが、成り行きで生きてきたような気がする。多分、私のように鈍感な人間は、失ってから気付くことが多いのだろう。

私は、農村計画という農学部でも馴染みの薄い分野に関わってきた。仕事は現地調査に基づく知見が基礎となるため、気になる情報があれば取りあえず出掛ける。調査では如何に人と会い、見て、何を感じるかが仕事の内容と質を左右する。そこで、

気さえする。時間の進み具合が年齢によって違うことは理解していたが、不覚にも戸惑っている自分が居る。

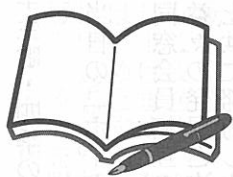
過ぎ去った時間の証であろうか、多くの思い出が甦る。そうした中で、子供時代から私を捉えているものに、「風は気ままに吹いている」という詞で始まる石原裕次郎の歌がある。少年期、孤独を感じて一人嘯いた時にも、自然とこの歌が浮かんだ。「どうせ男と生まれたからにや……、意気と度胸の人生だ」と詠うと、子供心に力が入った。度胸はからきしないが、「意気」は分かった。私の育った時代は、戦後の二ヒリズムと経済発展に対する楽観主義が交錯していたが、歌はそうした雰囲気をとらえてもいた。

考えてみると私は里地や里山で多くの時間を過ごしてきた。育ったのは大阪市郊外の千里丘陵で、子供の頃は昆虫採集に熱中した。夏休みには、朝が待てなくて、暗い内から捕虫網をもって裏山に出掛けた。背丈を超える草の夜露に全身が濡れそぼるのは堪らない快感であり、キイチゴや放置されたビワの実が乾いた喉を潤してくれた。濡れ鼠で帰宅する私をみて母は溜息をついたが、叱る

ことはなかった。成長して私は農村で仕事をする幸運に恵まれたが、少年時代の体感を引き摺りながら過ごしてきたように思う。

仕事用の軽自動車には、釣り竿と捕虫網を忍ばせている。新潟県の自然は豊かで、魅力的な溪流や子供の頃から憧れていた虫達に思いがけず遭遇することは珍しくない。赴任した翌年の初夏、山北地域の小川で長靴を洗っていたら、アオバセリが目前の石にとまって素知らぬ振りで羽を広げた。実に20数年振りの再会であった。網の中に捕らえたいという衝動が目覚め、その時から捕虫網を帯同することになった。こんな時、心臓はバクバクと音をたてる。

仕事から離れるに当たって募るのは、与えられた時間をこうした遭遇に任せたいという想いである。溪流で転んで身動きはならず息ができないような状態でも、空を見上げながら、「明日は、明日の風が吹かあ〜」と嘯っていたい。





河渡時代から

三 沢 眞 一

(生産環境科学科)

河渡時代からの教員は私一人になりました。ということは私の退職後はだれもいなくなるということで、河渡は遠くなりけり。といったところかと思いません。

農学部が河渡にあつた時代から振り返つて見たいと思います。4年生の3月まで、新潟県庁に就職することにしていました。所属していた土地改良研究室の佃助手が3月に入つて急に高校に転出することになつて、後釜にと指名を受けました。卒業

論で始めて知つた研究の面白さから4、5年くらいは回り道をしてもいいかな、という気持ちで受けることにしました。というのは、当時の助手の人は大方10年くらいのうちに出されていたからです。新潟県庁へは、大竹教授、鈴木助教と3人で頭を下げに行きました。

助手で残つた昭和44年から大学紛争が激しくなり、研究どころでなくなり、研究どころではなかつた、と思つていたところ、当時の大

生、学生の指導などを主に任せられるようになりました。

竹教授から、こんなところには私は居れないから辞める。ついては鈴木君が困るので、君は辞めるなど、気持ちを見透かされたように言われました。大竹先生は定年まで4年を残して昭和45年に退官されました。

それ以降鈴木先生と一緒に、また昭和47以降は豊田先生も加わつて3人体制で研究室を運営してきました。昭和52年には農業水文学講座が概算要求で通り、3人がそこに移行となりました。

鈴木先生が昭和53年に筑波大学に転出されたあと後任として昭和55年に緒形先生が東大からお出でになり、研究手法など鈴木先生とは違ふやり方を学びました。緒形先生も定年まで1年を残して昭和59年に退職され、その後は豊田先生と2人体制になりました。豊田先生は有能な人で、農業土木学会の副会長を始め、学術会議会員、新潟大学評議員、学部長などを歴任され、大変忙しい身であつたので、私が軍曹格として院

して、その改善に取り組んできました。

平成16年に豊田先生が退官されたあとは、研究室は私1人体制になりました。この平成16年は7月に新潟県中越地方に豪雨災害があり、10月に中越地震が起こつた災害の年でした。これを契機に新潟大学では積雪地域災害研究センターを母体として災害復興科学センターを設立しました。初代センター長には当時の副学長であつた伊藤忠雄農学部教授が就かれましたが、伊藤先生の要請で私が兼務でセンターの農業分野長を努めることになりました。農業分野で1名特任助教を採ることができたので、それで農業水利分野の人材を求め、採用したのが吉川さんです。吉川さんは5年間センターの特任助教としてまた実質的に水利研究室のスタツプとして頑張つてくれ、昨秋農業水利分野の准教授に選任され、私

のあと、研究室を引き継いでくれることになりました。

この43年の間、私がやってきたのは、農業水利分野の中で水質を中心とした水環境分野でした。鳥屋野潟を中心にした亀田郷の水質や、補給水として大通川、新川の水を反復利用している西川の水質などを対象と

ため、その効果検証調査を長年行つてきました。その調査結果に基づいた提言がもとで、平成19年に亀田郷に全国初の環境水利権が認められたことは嬉しいことでした。また浄化用水の効果検証で魚の生息調査もやるようになりましたが、それが佐渡のトキ放鳥に向けての水田魚道の開発につながりました。また西蒲原では西川の新たな水源としていた清津川ダムが中止になつてしまつたことから、効率的な灌漑についての調査、解析を行つてきました。

この間、自分の好きなように研究が続けて来られたのは、上記に挙げた先生方と一緒にやってこれ、常に暖かく指導し、接して頂いたからだと思います。また卒業生の方達には、在学中に調査研究に協力して頂いただけでなく、卒業後も行政機関や、土地改良区およびコンサルなど民間会社の担当者として調査に協力頂いたり、便宜をはかつて頂きました。あわせて心よりお礼申し上げます。ありがとうございます。

支部だより

◆北海道支部

本年度15回目を迎える新潟大学農学部北海道同窓会の総会は、10月23日(土)に、帯広市近郊の十勝川温泉にある、「富士ホテル」で開催致しました。

ここは十勝平野を見わたす静かな温泉宿で、出席は新潟から駆けつけた小島元学部長をはじめ十勝地方の同窓生を中心に11名でした。

開催案内は毎回90通ほど出していますが、出席できない方からもハガキやメールなどで近況報告があり、総会で紹介しています。

当日夕方、十勝川温泉の名物、モール温泉で汗を流した後、午後5時30分から総会を開会しました。



成田会長の挨拶と同窓会常任幹事会報告、小島氏の来賓挨拶の後、五十嵐が平成23年経過報告・会計報告、平成24事業・予算案を協議し、それぞれ承認されました。総会に続く

宴会では、近況報告などを語り合いました。その後、部屋での2次会となり、なごやかなひとときを過ごしました。

今回も、石塚副会長から提供のあった広尾産の「海の幸」を手に、それぞれ帰途につきました。次回の総会は札幌方面で開催予定です。

五十嵐 龍夫(昭51農)

◆福島支部

三月十一日の東日本大震災の影響は、時の流れを大きく変えようとしています。震災直後は自衛隊・各県の災害派遣車両が災害地に向けて数十台の車列がみられたのに、今では数台の警察車両を毎朝見送るだけとなりました。

福島支部でこの度の震災に直接関わる会員は15名で、逸早く葛尾村から新潟市へ避難した人を始め、家屋や職場を失った人、サテライト校での変則授業をする人など様々な影響を受けています。

毎日弓道のコートで通う橋高では、四月まで登校禁止、五月から校庭や弓道場の除染作業が続く、八月には二名の弓道部員が新潟市と福井市に転校、今日やっと正常授業が進められている状況です。

更に昨今、コメ出荷停止の問題が起き、検査で安全を確かめてきたはずの福島市大



波地区のコメに高い放射性セシウムが出た。川と山に挟まれた場所に、10枚合わせて約26アール。小さな田んぼが並ぶ。

十一月二十一日NHKテレビの取材に、支部事務局・沢田吉男さん(福島県庁主幹)が「重点調査区域」を解説されている様子を見ました。以前、震災直後の三ヶ月間、休日返上勤務体制の中で対応し、今も農業情勢の復興計画や食の安全安心をどのように進めていくのか、諸問題が山積していることが分かりました。

九月二十九日に長岡市山古志で農学科第五期会が開催され参加しました。とくに山古志の震災からの復興の状況を、福島復興との関わりを重ねて確かめることができ、「新潟県中越沖地震、山古志の被害状況と歩み」と観光協会の方の現地視察案内の中で、今も地中に残る三階建家屋の無残な姿を見るにつけ、平成16年から四年間の復興の歩みから、人々の苦しみと喜びの心を体得できました。そして三割の方々が山古志を去っていかれた話には胸を締め付けられる思いでした。

「来年のコメは作られるのか」農家の叫び声が聞こえます。「本当に故郷

に帰れるのか」被災者の怒りが見えます。

高久 英昭(昭32農)

◆富山支部

富山県支部は、平成23年7月29日(金)、農学部農業生産科学科の青柳斉先生をお招きし、平成23年度の総会・懇親会を富山市内において盛大に開催いたしました。

会員40名の参加の下、総会では、林靖太支部長の挨拶の後、平成22年度活動及び会計報告、平成23年度事業及び予算案を協議し、それぞれ承認されました。また、青柳先生からは、大学の近況や農学部動向についてお話しいただき、久しく大学を訪れていない会員には、当時の松林とスイカ畑に囲まれていた五十嵐キャンパスがどのように変わっているのか、思いを巡らした次第です。

総会に引き続き、懇親会に移り、近況報告や大学時代の思い出に花が咲きました。特に福島第一原発の事故により、我が国のエネルギー戦略のあり方が見直され、今後再生可能なエネルギー利用の推進が高まっている中、本県でも豊富な水



資源を利用し

た小水力発電の積極的に着手していること等々、今日的な話題で盛り上がりました。

会の締めには、恒例の「四季の新潟」と「農学部学生歌」を出席者全員で合唱し、支部の結束を図りました。

終わりに、3月11日に発生した東日本大震災で亡くなられた方々に對し心からお悔やみ申し上げますとともに、被災された皆様にお見舞い申し上げます。また、農地や海岸防災林等に多大な被害が発生し、多くの同窓生の方々が今も日夜復旧・復興にご尽力されていることと存じますが、県からも東北へ派遣したところですが、一日も早い復興をお祈りして、支部の近況報告とさせていただきます。

森松 亮 (昭56林)

◆ 首都圏支部

3月11日の東日本大震災は関東地方でも大きく揺れました。福島の子力発電所が停止した為、計画停電が実施され、電車の運行ダイヤも大きな影響を受け、6月の総会に向けた幹事会の開催も思うように開けませんでした。準備不足でしたが、首都圏農学部同窓会総会を6月に開催しました。更に、10月に幹事学部として、全学の首都圏同窓会総会を開催しました。

6月4日(土)、ホテル銀座ラフィナーで初めて新村農学部長をお招



きして、農学部同窓会総会を開催しました。被災した岩手県から、岩手県立大学教授の金子与止男先生(農・林学S51年卒)をお招きして、「マ

グロは絶滅するの」か「トロ信仰」もう卒業しよう」という演題で講演をして頂きました。金子教授は、元ワシントン条約事務局に勤務した経験があり、条約でクロマグロの漁獲規制をするかどうか議論されていること、IUCNのレッドリストに数種のマグロが掲載されていることなどを話され、日本人はそろそろマグロにこだわらずに、食習慣を見直そうと提案されました。

又、6年ぶりに農学部が幹事学部となり、全学首都圏同窓会総会を10月15日に開催しました。当日は、下條学長が所用で欠席されましたが、新村農学部長と進藤農学部同窓会長が来賓として出席して下さいました。農学部からは44名が出席し、全体で99名が集まり、活気のある総会となりました。松田謙協和発酵キリン(株)社長(農・農化S46年卒)か

らは、「バイオ医薬事業の最近の話題」という演題で講演をして頂きました。協和発酵キリン(株)は、バイオ医薬の研究開発に注力し、赤血球増多剤、白血球増多剤などを開発し、最近では、抗体医薬の開発に力を入れ、成人T細胞白血病(ATL)の抗体医薬は有効な治療成績を収めている内容でした。本講演は、出席者から大変好評でした。懇親会では、プロ歌手舞さくらさん(教育S51年卒)の新曲熱唱、石塚新潟市東京事務所長(人文S55年卒)の新潟サポーターズクラブ入会のお誘い、アメリカ・ミシガン州から参加の三上さん(農S51年卒)の挨拶、最高齢参加の山本さん(農S25年卒)と最年少参加の八木さん(農H14年卒)のトークと続き、来年度幹事学部の歯学部小林正司さん(S49年卒)の挨拶の後、大石名誉会長の音頭で「四季の新潟」を大合唱の後、金子前首都圏農学部同窓会長の3本で会を終りました。

農学部同窓会員の皆様、本年も多数のご参加を頂きまして有難うございました。これからも特に若い世代の方々のご参加をお待ちしております。

佐藤 純一 (昭47農化)

◆ 秋田支部

総会は6月25日(土)に秋田キャッスルホテルで開催しました。役員改選では、副会長に小島武志(昭52卒)

氏を、幹事に佐藤誠洋(昭58卒)氏と生駒隆一(昭61卒)氏を選任しました。また、これまで事務局は秋田市役所の会員で構成されてきましたが、新たに秋田県庁の黒沢雅人(平15卒)氏にも加わっていただき、新たな体制で同窓会を盛り上げていくことを確認しました。

11月2日(水)には、歴史的農業の祭典である第134回秋田県種苗交換会の開催に合わせて「新潟大学農学部同窓会秋田県支部講演会」を横手市で開催しました。これは、「県内の多方面で活躍する会員で何か社会貢献的なことはできないものか」と以前から思案していたところ、総会で提案があったため実現したものです。

秋田県産業労働部の東海林・食農観統括官の基調講演のあと、会員から講演をしていただきました。秋田県立大学の近藤正准教授(昭62卒)からは「水

田を活用したドジョウ養殖について」と題し、日本の食文化に不可欠なドジョウが、生育環境の悪化等による捕獲



量の激減で9割を輸入に頼っているため、水田での養殖が可能となれば新たな産業となりえること。また、同大学の藤晋一准教授（平元卒）からは「近年のばか苗病の増加とその対策について」と題し、秋田県で昨年多発したばか苗病の感染メカニズムと、温湯消毒や微生物農薬による防除方法について話をしていただきました。いずれの講演も興味深い内容で、参加者は熱心に聞き入っていました。

例年、12月第1週の土曜日と決めている忘年会では、果樹試験場で2回にわたって開催された神戸和猛登顧問（昭31卒）の「リンゴ栽培技術講演会」や、前述の講演会の内容を報告するとともに、参加者の近況を報告しあいました。また、出前民謡から秋田音頭などを歌ってもらい、賑やかな会となりました。

鈴木 善彦（平3農）

◆長野県支部

平成23年度新潟大学農学部長野県支部の同窓会が10月29日、長野市のホテルで開催されました。長野県支部が結成されて15回目になります。

ご存知のように長野県は周囲を山に囲まれた山岳県です。松本、伊那、佐久、善光寺の4平野に住む者が、同窓会に参加するためには山、谷、峠を越えなければなりません。出席者は13名でしたが、それぞれ各地から馳せ参じました。



会では、例年のように、幹事会報告と支部会計報告の承認に続き、今年は農学部同窓会長、進藤隆様よりご講演を頂きました。

22年度農学部卒業生の就職率が97・5%と高いこと。又新潟大学、並びに農学部の入学希望率が高く、全国レベルで見ても高く評価されているとの事等をお聞きし、我々卒業生としては嬉しく思いました。が反面、最近の学生は勉強は一生懸命するが、「学生歌」を歌わず「学生歌」のCDを配布する時代になってしまったとのこと。何かといえれば必ずEins, zwei, dreiで「学生歌」を歌った我々としては、時代の変化を思わずにはいられません。

続いての懇親会では、アフガニスタン、ロシア、イタリア、ドイツ、中国、タイ等、海外協力隊等で活躍されていた同窓生の話題で盛り上がりました。

また、果樹試験場の担当者からは、長野県で育成されたリンゴ、シナノゴールドがヨーロッパの南斜面、北イタリアで広く栽培され、EUの人々の食卓を賑わせて

いるとの報告もありました。温州みかんや柿に次ぐEU内での現地生産です。

また温暖化で、従来、米作不能といわれた標高1300mの菅平高原で、この2年間米作りが可能となつてしまったことや、国会で審議中のTPPの議論にも至りました。

最後は、いつものように皆で信州そばを食べて締めくくりました。1年に1回、それぞれの立場で、それぞれの生き方を確かめ合える楽しく有意義な同窓会でした。

桜井 正一（昭46農）

◆福井支部

福井県支部は、年が明けた平成24年1月27日（金）に、馴染みの居酒屋にて総会を開催いたしました。当初は20名ほどの出席が予定されておりましたが、当日はニュースになるほどの大雪に加え、インフルエンザが大流行するなど、大変厳しい状況となり、事務局も大いに慌てました。

このような中、雪にも交通網のマヒにも負けず、15名の会員が会場にたどり着き無事に総会が開催されました。

橋本孝一会長の挨拶に続いて、朝日泰蔵事務局長より会計報告をしていただき、最後に明間から同窓会常任幹事会の報告をいたしました。

報告させていただいた中でも、この就職難の時代にあつて、就職率がほぼ100%である新大農学部に対

して、出席者から敬服と賞賛の声がかれま

した。また、3月11日の大震災に

関しては、被災地から最も遠い支部であり、なかなか直接お役に立てる機会がありませんが、亡くなられた同窓生諸氏を悼み総会を締めくくらせていただきました。

続いて開催された懇親会は、青木源久会員による乾杯のご発声で盛大にスタートしました。

福井支部では、参加者全員が順に名前と近況を紹介するのが慣わしです。居並ぶ大先輩を前にしての自己紹介は、とても緊張するものですが、県内の同窓生が様々な職場で活躍している様子を聞くことができるのは、年に一度の大きな励みでもあります。

懇親会の終盤では、学生歌を声高らかに歌い、北岡欣一前会長に締めのご挨拶をいただいて帰路につきま

した。来年は少しでも多くの会員が参加できるように、会場や開催時期を工夫していきたいと考えております。

明間 基生（平5畜産）



職場紹介

新潟県農業総合研究所食品研究センター

知野 秀次（平14農生）

【沿革】

新潟県農村工業指導所（新潟県農業総合研究所食品研究センター）は、農村工業の育成や農家の副業の振興を目的とし、昭和16年5月に加茂市神明町に設立されました。

昭和33年4月、時勢に対応し、農産物を利用した加工に関する総合研究ならびに食品産業の技術指導を行うことを目的とし、新潟県農村工業指導所が新潟県食品研究所に改称されました。その後、昭和56年10月に新潟県食品研究所は現在地の加茂市新栄町に移転しました。

平成9年4月、アグロタンク構想により、新潟県食品研究所は農業総合研究所食品研究センターに改称されました。同時に、穀類食品課を穀類食品科に、園芸特産食品課を園芸特産食品科に改めるほか、食品工学科が新設されました。平成12年4月、総合食料基地の地位確保や農業・食品産業の振興と活性化を図るため、3室の開放研究室を設けた研究交流棟が整備され、現在に至っています。

【業務】

当センターは、農業や食品産業の振興を目的として、県産農産物の高度利用や高付加価値化を図り、多様化する消費者ニーズに即した特産品づくりを支援しています。そのために、食品加工の基礎研究から製造の技術開発までの一貫した研究開発を実施し、成果の指導業務を行っています。具体的な業務としては、①研究開発、②技術相談・指導、③講習・研修、④業界・団体との連携、⑤開放研究室ならびに分析機器の貸し出しになります。

研究開発ではニーズに即応した幅広い研究ならびに技術開発に着手しており、現在の主要な研究テーマは①安全・安心な県産農林水産物等の高付加価値加工技術の開発、②農産物・食品の品質評価、③高鮮度貯蔵・流通技術の研究開発、④ヘルスサポート食品素材の開発の4つになります。得られた研究成果は講習会や学会等で発表し、新技術は職務発明として特許権を取得・保有しています。技術相談・指導業務では、食品

加工技術に関する問題の相談に応じ、当センターの施設を利用した実地指導または現場指導を実施しています。問題解決のためには試験研究や技術者育成など、実態に即した効果的な支援に取り組んでいます。

また、開発した新技術を中心に研究開発成果をいち早く伝達することを目的とし、食品産業関連業界に対して講習会または研修会を実施しています。さらに、中央研究機関や大学などから専門講師を招き、最先端技術に関する知識の研鑽の場も提供しています。

業界・団体との連携においては、社団法人新潟県食品産業協会と傘下の業界団体や農業団体などとの交流を密にし、事業の連携や共同研究の推進を図るとともに、研究報告、関連資料の公開および各種情報を提供しています。

開放研究室ならびに分析機器の貸し出しに關しては、開かれた研究機関として、研究交流棟に開放研究室を3室設置し、民間企業等に貸し出しています。それに加え、民間企業や団体などに必要な分析機器（105種類）の貸し出しを行い、県内民間企業のサポートに努めています。



前列左から、諸橋敬子（旧姓 齊藤、昭62農芸化学科）、知野秀次（平14農業生産科学科）、吉井洋一（昭56農芸化学科）、西脇俊和（平4農芸化学科）、高橋 誠（平6畜産学科）
後列左から、佐藤嘉一（平3農学科）、赤石隆一郎（平13応用生物化学科）、太養寺真弓（平8応用生物化学科）、渡辺 聡（昭61農芸化学科）、本間紀之（平5畜産学科）

【当センター新潟大学農学部出身者】
当センターの研究員20名のうち、10名が新潟大学農学部の卒業生になります（穀類食品科5名、園芸特産食品科3名、食品工学科2名）。

卒業生が携わった当センターの研究成果や技術を紹介しますと、まず米の消費・用途拡大を目的としたバックご飯や米粉の開発ならびに米粉を利用したパン、ケーキ、麺の製造技術が挙げられます。そのほかにも、食品の型崩れを抑える柿渋液の開発、小麦アレルギーの心配がない米醬油や県産のサケを使用した魚醬油、ルレクチエの追熟技術、おけさ柿の渋抜き技術、高血圧に効果があるとされているギャバ入りニンニクやおかゆなどがあります。これらの研究成果や技術は県内の食品企業で商品化あるいは利用されています。

特集 東日本大震災の復興に取り組む

東日本大震災からの復興を目指して

岩手大学農学部准教授

井良沢道也(昭54林)

平成23年3月11日に、M9.0の巨大地震が発生しました。この地震とそれに伴って発生した津波、及びその後の余震による死者・行方不明者は1万9000人以上に達しています。不幸にして犠牲になられた方々のご冥福をお祈り申し上げると共に、被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。

東北地方は3年前の2008年に内陸直下型地震である岩手・宮城内陸地震が発生するなど災害が相次いでいます。今回発生した地震は海溝型地震で長さ500kmの範囲の3つの震源断層の破壊を伴うもので、未曾有の大津波が発生しました。被災地へ行くたびに防災に関わる研究者の一人として改めて自然の猛威の前に無力であることを痛感させられます。今回の大震災発生から取り組んでいることを述べます。

今回の地震動については、フリー工解析によるスペクトルで、0.1-10.3 sec程度の短周期が多かったです。家屋に被害を与えるような周期1-2 secの成分は少なかつたことが建物被害は少なかつた原因と考え

られます。地震による広域的な斜面変動把握については、衛星画像や空中写真判読で、大規模な崩壊・地すべりや河道閉塞は発生していないこと、強震動および津波が来襲した三陸沿岸や阿武隈山地沿岸部でも崩壊発生は少ないことがわかりました。その後、何回かの現地調査などによるデータにもとづき、崩壊・地すべり・変状発生等の斜面変動発生箇所分布図を作成しました。分布は、岩手県二戸市から長野県北部地震で発生した長野県栄村まで、約750箇所を把握しています。東北ではほとんど奥羽山脈より東側に見られ、全体として、震度5強以上の地域にほとんどが発生しています。地質帯ごとの発生密度を見ると、工学的異方性の発達しやすい堆積岩・変成岩で分布が高くなっています。また、火山灰堆積層の厚い丘陵では、移動距離の大きい地すべり(性崩壊)が発生しやすく、福島県白河市葉ノ木平で13名の死者を出しています。

このように大震災では大津波災害が圧倒的に被害が大きいため、全体として土砂災害の発生が目立たなくなっていますが、その後の余震による災害も含め、1-11件の土砂災害、19名の方が亡くなっています。

現在、地形や地質の面、地震動特性の類型化にもとづいて、地震による斜面変動危険区域の評価手法の検

討に取り組んでいます。他地域において想定地震条件が与えられた際に、危険地域のゾーニングを行えるようにしたいと考えています。

今回の大津波における住民の避難行動の解明はされつつあります。わかっている事は「まず逃げた一人が助かったことです。どんなにハード対策が整備された地区でも今回の津波のパワーはそれを凌駕していました。自然の力は予想を上回ることを想定すべきで、ハードだけでなく避難などソフトの大切さを改めて実感させられました。こうした想定を越える災害が発生する可能性を国民へ伝えていくことが大切だと思います。学校教育の場で災害をとりあげていくことも重要であり、小中学校では防災教育を義務づけることも考えて良いと思います。かつて地域でどのような土砂災害があったかを、紹介し継続的に伝えていくことが望まれます(災害遺構など)。安全に避難できる避難計画の策定、防災意識を維持・向上させ、経験を教訓として後世に伝える取り組みの充実、ハザード

マップは真に住民に理解され、活用される工夫が必要だと思います。現在こうした分野に



東日本大震災による斜面変動発生箇所の分布図

ついても取り組んでいます。今回の巨大地震により日本人の考え方などが大きく変わったと言われています。新潟中越地震などふるさと新潟も復興に向けて努力されているかと思えます。来るべき東海地震・東南海地震・南海地震など今回の未曾有の災害から学び、今後の災害に備えたいものです。

がんばろう！東北

柏倉 勉(平4農芸化)

実は、今でもあの光景が現実なのか、理解しきれない自分がいます。私は現在、建築士として家業の工務店を継いでいます。東北地方太平洋沖地震は事務所内で体験しました。大きくいつまでも止まない揺れ、しかし、それでもこれ程の被害が出ることは想定していませんでした。というのも、確かに規模は大きいですが、阪神大震災のような建物に壊滅的なダメージを与える揺れではないと感じたのです。ところがそれは大きな間違いでした。建物よりも地盤に起因する被害と津波による被害が甚大だったのです。帰宅途中に見た驚きの光景。倒壊し屋根に突き刺さった大型看板、崩れた擁壁、隆起して通行できない道路…。

夕闇が迫る中、まずは情報を求め、避難場所である中学校へ行くことにしました。繰り返し起こる大きな余震、ラジオから流れる衝撃的な報道。

「仙台空港が津波で冠水しました」
「荒浜で数百名の遺体が発見されました」

何が起きているのか、これからどうなるのか不安なまま一夜を過ごしました。

翌日帰宅して目にした新聞の航空写真。沿岸部のお客さんの顔が浮かびました。幸い、命を落とされた方はいませんでした。二件が流失、一件は集団移転のため、再び住むことができなくなりました。沿岸部の津波被害は事の他ひどく、石巻などは爆撃を受けたのではないかと感じる程壊滅的でした。

震災当初は、専ら会社周辺のお客さんを周り、安否確認と屋根のシート掛け等の応急対応に追われました。

今回の震災では、あまりにも多くの家屋が被害を受けていて、内陸部の対応だけでも全く追いついていません。とても数年では収まらないでしょう。私に出来ることは僅かですが、命があることに感謝し、一歩ずつでも復興に寄与していきたいと思っています。

震災後の対応について

沢田吉男(昭56農)

3月11日の東日本大震災は、東北の岩手、宮城、福島、福島の3県に甚大な被害をもたらしたが、福島県では地震や津波の被害も大きかったものの、福島第一原子力発電所の爆発事故による原子力災害の被害が最も大きい。原発被害の影響が少ない岩手



松川浦の魚市場(廃墟)

県や宮城県は、着実に復興が進んでいるものの、福島県はいまだに人が立ち入れない地域があるなど、復興も大幅に遅れている。

原発爆発後、原発から約60km離れている福島市においても直後には20MSvの空間線量を観測した。また、伊達市などでは、その後、同一地域でも部分的に空間線量の高い場所(ホットスポット)の存在が明らかとなり、警戒区域、計画的避難区域以外でも避難を余儀なくされている人もいる。

原発事故が発生した場合、国は原子力災害対策特別措置法に基づき原子力災害対策本部を立ち上げ対策を進めることとなっており、一方、県は防災計画に基づき空間線量のモニタリングとともに、水道水や農産物、土壌などの環境試料の緊急時モニタリングを実施することとなっている。事故当時、私は県庁の農産物安全流通課で農産物の安全性確保を担当していたことから、農産物のモニタリングを担当することとなった。

県の計画では、環境試料の測定を大熊町にある県原子力センターで行うこととなっていたが、停電と高線量のため原子力センターが使用できず、福島支所のゲルマニウム半導体検出機で放射性物質を測定することとした。しかし、台数が2台と少なく、とても農産物の測定までは手が

回らないことから、当時、県庁の会議室に移ってきた原子力災害現地対策本部(オフサイトセンター)と交渉し、財団法人日本分析センターに測定を依頼することとした。

県による農産物のモニタリングは、3月19日に原乳を測定したのが最初であり、この時、飯舘村の原乳の放射性ヨウ素が暫定規制値300ベクレル/kgに對して5、200ベクレル/kgに達した。さらに、3月21日に採取した野菜では、1万ベクレル/kgを超える放射性ヨウ素やセシウムが検出され県内に衝撃が走った。

このため、県では畜産団体やJAGグループ等と協議しこれら農畜産物の出荷自粛を決めるとともに、迅速な測定が必要なことから県職員がサンプルの収集、調整、運搬までを行うなどモニタリング体制の強化を図った。また、国からはこれら農産物の出荷制限指示が出され、その後、シイタケ、山菜、果樹類、淡水魚や海産物、牛肉など次々と暫定規制値を超えるものが出てきたことから、県自らがモニタリングを実施するため1台2千万円のゲルマニウム半導体検出機を国の支援により10台配備した。

モニタリングは、新たに出荷期を迎えた農産物や定期的に確認が必要な畜産物に加え、出荷制限解除のための継続的な調査も必要なことから、土日に関係なく毎日2交代制で測定を行っている。9月からは玄米の調査が始まり、予備調査、本調査併せて1,700を超える点数を調査した結果、放射性セシウムの暫定

規制値500ベクレル/kgを超える玄米はなかったことから福島県全域で米の出荷が可能となった。

しかし、1カ月後、JAGの自主検査で暫定規制値を超える玄米が見つかり、その後、緊急調査で福島市、伊達市、二本松市において暫定規制値を超過した玄米があったことから、12月末現在でこれら3市の一部で米の出荷が制限されている。

米については、昨年4月の段階で国が放射性セシウムの土壌から米への移行指標を0.1とし、土壌の上限を5,000ベクレル/kgとしたことから、土壌調査の結果から警戒区域、計画的避難区域と当時の緊急時避難準備区域を作付制限することとされた。しかし、その後、それ以外の地域で最高で1,500ベクレル/kgを超える玄米が出たことから、その要因を解明すべく国や大学等と連携し土壌や栽培状況等を調査することとした(ちなみに、私は6月の異動で土壌調査を担当することとなった)。

それらを取りまとめ昨年末に中間報告を行ったが、その中で土壌中の



磯部地区で水田の瓦礫を撤去している風景



用排水にたまった土を取った圃場

カリウムの量が放射性セシウムの玄米への吸収に関与している。しかし、それだけでは説明できない事例もあり、用水や土壌の物理性など複数の要因が関係している可能性もある。調査結果からそれらの条件はほ場ごとに異なっており、玄米から高濃度の放射性セシウムが検出された要因はほ場ごとに異なることも考えられる。

以上、大震災以降、県が取り組んできた放射性物質への対応の主なものを述べたが、その他にも畜産や水産、稲わらや堆肥、さらには風評被害など放射性物質は本県農業に数えきれない影響を与えており、また、それらは突然、想像もつかないところで発生することから、対応が後手に回ることも多い。しかし、今後は、県、市町村、県民が一体となって農林地等の除染対策を進め、長い道のりになるかもしれないが福島県農業の復興を進めていきたいと思う。最後に、これまで本県に対して御支援・御協力をいただいた皆様に心より感謝を申し上げます。
(なお、本文中のデータや中間報告等は、県ホームページに掲載しておりますのでご覧ください。
<http://www.cms.pref.fukushima.jp/>)

東日本大震災に対するJAグループの対応について

JA全農福島

菊地 一正(昭54農)

平成23年3月11日、午後2時46分。私は、福島県南部に位置している石

川町の国道118号で信号待ちをしていました。突然、車がひっくり返るような大きな揺れが数分続きました。これは大変なことが起こったと直感しましたが、事務所に戻る途中の道路のひび割れ・崩落、屋根の瓦の崩落、そして停電、断水等、正しく自然の猛威をまざまざと感じさせられました。

しかし、その後の津波や東京電力福島第一原子力発電所の事故など、内陸部に勤務している私には想像すら出来ませんでした。

あれからすでに10ヶ月以上が経ちました。12月16日、冷温停止状態と野田総理は発表しましたが、他県と違い放射性物質の影響で、特に食と住はまだまだ混乱の状況です。

県外に非難している県民は、12月末現在で6万人を超えています。全国全ての都道府県にお世話になっています。同窓生の皆様にも、それぞれの立場でお世話頂いています事に対し、心より御礼申し上げます。

さて、JAグループとしての原発事故への対応は、大きく分けて5つになります。

- ① 損害賠償の請求
 - ② 安全・安心PRと風評被害払拭のための販促キャンペーンの実施
 - ③ 国・県の行政機関およびJAグループ全国組織への要請活動
 - ④ 現場における出荷停止解除への取り組みおよび付推進
 - ⑤ 本年度の栽培に向けた放射性セシウム吸収抑制対策の推進
- まず、「JAグループ福島東日本大震災復興・原発事故対策本部」を5

月に立ち上げ、「農業復興対策班」、「損害賠償・補償対策班」、「JA経営対策班」を設置しました。さらには、県および専門農協や関連会社も含めたJAグループ東京電力原発事故農畜産物損害賠償対策福島県協議会を設置し、協議会として損害賠償の請求を東京電力に行っています。

「損害賠償・補償対策班」は、各JAから提出された請求内容と仮払いされた損害賠償金のチェックが主な業務です。全農としては、2名を配置しています。12月末までに、約450億を請求し、約9割が仮払いとなっています。

販促キャンペーンは、各JAも実施していますが、JA全農としては消費地を中心に「がんばろう ふくしまフェア」をメインに60数回実施しました。概ね好意的だったようです。(尤も、いやな人とか、放射性物質が気になる人は来場しないと思いますが)

要請活動は、農畜産物被害や農業復旧・復興、米の安全安心確保対策等に関する要請を、菅内閣総理大臣をはじめ各閣僚や各党党首、県知事等に行いました。

私は、郡山営農事業所に勤務していますが、県中・県南地区は園芸が盛んな地域です。当時は、畑にあった野菜に直接放射性物質が降りかかったため、かなりの品目が出荷や摂取の自粛になりました。その解除のため、県JAグループ一体となつて、県が定めた緊急時モニタリング検査に取り組みました。さらには、生産しても売れるかどうか不安で裁

培を迷っていた生産者が多くいたため、とにかく作りましょう、売れない場合は東電に請求しましょう、と栽培の推進も行いました。

放射性物質の土壌からの除去は今のところ難しい状況ですが、今年の栽培結果や放射性同位体の特徴および試験場の研究などによって、対応技術が明らかになってきています。まず、果樹では、根からの吸収より樹皮からの移行が想定されたため、現在高圧洗浄機による除染が行われています。さらには、放射性セシウム吸収抑制対策を推進しています。そして、生産された農畜産物は、品目によってはサンプリングになりませんが、県のモニタリングや行政による分析そしてJAグループによる自主分析等により、安全を確認して出荷する予定です。

放射性物質は、カリウムで代表されるように、私たちが食べている食品に微量ではあります。ごく普通に含まれています。全ての食品がゼロか検出限界値未満であるに越したことはありませんが、国が定める基準値未満であれば流通できます。本年は、今まで以上に、より安全に、より美味しく生産する努力をJAグループ一体となつて取り組みますので、放射性物質を正しく理解して、冷静な対応を宜しく願っています。報告とさせていただきます。



同窓会の新潟県支部結成会を開催

平成24年1月28日(土)正午から、進藤同窓会長外15人の同窓生が発起人となって進めてこられた同窓会新潟県支部の結成会が開催されました。

当日は、寒波のさなかで、足もとの悪い中、旧教職員の継田先生をはじめ、S33年卒から、H22年卒の同窓生八十余名が、凍てつく万代橋を渡り、会場の「オークラホテル新潟」に集いました。

会は、第一部として結成会が行われ、まず、発起人を代表して進藤同窓会長から、県支部設立の趣旨、支部としての活動及び「同窓会創立60周年記念事業」について挨拶があり、引き続き、箕口教授(S59林)が議長となり、県支部の会則及び役員について、三沢教授(S44農工)から提案があり、満場一致で了承されました。

その後、第二部として、懇親会が行われ、渡辺新支部長から「一年一回の懇親会をベースに和気藹々とした会にして、少しずつ参加者を増やしていきたい」と挨拶があり、新役員の紹介も併せて行われました。引き続き、新村農学部部長祝辞、小林一三顧問の乾杯の後、懇談の席となりました。

懐かしい再会、新たな出会いとなった楽しい一時でした。後半は、大先輩の皆さんが壇上上がり「農学部学生歌」と「四季の新潟」をリードし、全員で熱唱しました。

最後に、小島誠顧問が乾杯でしめられ、再会を誓い合いました。役員の方々は以下のとおりです。

顧問 小林 一三 (S33林)
顧問 小島 誠 (S36農)



新役員の方々



歓談風景



学生歌合唱

- 支部長 渡辺 仁 (S52農工)
- 副支部長 長澤 裕滋 (S50農)
- 副支部長 鈴木 健次 (S52農工)
- 副支部長 高橋 一成 (S53農)
- 庶務 山本 仁志 (S39林)
- 会計 佐野 義孝 (S60農)
- 会計監査 小林 昭三 (S41農)

会計監査 椎谷 一幸 (S63畜)

同窓会支部は、年1回の懇親会を、予定しております。会の日程が決まりましたら、県内の同窓生にご案内をいたしますので、お誘い合わせの上、是非参加してください。お待ちしております。

ペンリレー 同窓生からのたより

大切なのは、
人とのつながり

五十嵐正博 (平4農工)



その時は突然
やって来ました。
3月11日午後2
時46分、職場の防
災ラジオの警報音
が鳴り響く中、大

きな横揺れが1分以上も続きました。その日は高校入試の合格発表で、多くの受検生が来校していました。揺れが治まったのを確認してすぐに外へ飛び出し、受検生たちの安全確認とその後の対応をしました。昨日のことのように覚えてます。

現在、私は新潟県立新発田農業高校に勤務しています。大学では農業工学科で土木や農業機械を学んでいましたが、今は造園関係の授業を中

心に教えています。高所恐怖症で、しかも花粉症の私にとつて、木に登つての剪定作業は地獄の苦しみではありませんが、生徒の手前、冷静を保ちながら指導をしています。また、校務分掌は生徒会担当で、生徒と接する機会が多く、1年中忙しく動き回っています。

東日本大震災では、「今、できること、すべきことは何か」を生徒と一緒に考え、地震発生の日後には校内と街頭で被災者支援募金を始めました。また、学校のある新発田市に避難所が開設されたことを受けて、ボランティア活動や鉢花の提供、小動物とのふれあい体験を行いました。他にも節電・節水を呼びかけるポスターや被災された方へのメッセージカード作成など、取り組みは今も続いています。

この経験を通して、生徒は「命の大切さ」や「人への優しさ」を学びました。私自身も生徒の成長を見ることで、新たな発見をしたり、感動

させられたりと学ぶことが多かったです。毎日、笑って、泣いて、喜んで、怒って、飽きることもない人間味あふれる生徒たちに囲まれて、私は仕事をしています。

今年、新発田農業高校は100周年を迎えました。同窓である私にとって大変な年ではありましたが、大仕事を終えて感じたことがあります。それは、「人とつながることの大切さ」です。今まで18000名の卒業生の方々がいたからこそ、今の新発田農業高校があると実感し、これからも多くの生徒、同僚、保護者、地域の方々とながらながら、地域に愛される学校となるように努力したいと強く思いました。

創立100周年記念事業として、創立当初の赤レンガづくりの校門を再現しています。お近くにお寄りの際には、是非この赤レンガづくりの校門をご覧ください。

さて、次回ですが、今の職場で一緒に勤務しています柴宮秀生さん(平8林)を紹介します。生徒思いのかなり熱い教員ですので、ご期待下さい。

大きな繋がりの中のひとり

平木叙光(平6農工)

私が大学を卒業したのは平成六年三月のこと。大学での農業土木専攻を生かせる職として富山県職員の農業土木職を選択しました。農業基盤



職場の同窓生の方々と。後列中央白シャツが筆者

ます。協議が中心で思うように進まない事も多くありますが、「次に繋げるもの」という信念で業務に当たっています。

このような仕事に追われる日々ですが、その中で私が今夢中になっていることは、「子育て」でしょうか。三代後半になってから長女・長男と二人の子どもができて、早く帰るとお風呂に夕食(これらはめつたにできませんが)、週末は殆どの時間を一緒に過ごします。年をとってからの子どもであるため、甘やかしているのかしよっちゅう抱っこしてしま、筋肉痛になるくらいです。ただ、この子たちに安全で安心した食生活を送ってもらいたいと思えば、業務にも熱が入ると言うものです。

その業務を通じて、耳にした言葉に凄く共鳴させられました。その言葉は「現在のこの世界は未来から借りているものであり、未来へは何かを足して返すべき」というものでした。ただ返すのではなく、「何かを足して返す」ということには、これま

の整備として、農作物を生産するほ場の大区画や用排水路の改修等の業務を経験し、今は農業に欠くことのできない用水を河川から利用する権利に関する業務を担当しています。

で考えが及ぶことはありませんでした。ちよんど私が福島へ震災の復興のため派遣された際に聞いたもので、私自身もこれからの自分に問いかけ続けていきたいと思っています。

この言葉を耳にすることができた福島への派遣の際、「新潟大学」という繋がりにも感動させられました。派遣先には先輩から後輩までの同窓生の方が数名いらつしやいましたし、更に自分の同級生も私が派遣される以前や同時期に派遣されていた。自分が何かをする際に、同窓生の方と繋がりを持つているということは、凄く貴重な財産であること、を思いもよらないところで実感できました。

学生の皆さんも、これからいつどんなことでの繋がり活かされるかわかりません。大きな繋がりの中の一員であることを忘れずに、社会へ羽ばたいてください。私の繋がりを引き継いでもらう次の執筆者は、またまた同級生ですが、飯島実さんです。

ねむる猫

朝日泰蔵(昭52農)

▼仕事

福井県農業試験場で試験研究の企画調整および農業技術の普及の仕事にかかわっている。

▼趣味等

①読書(好きな作家は村上春樹、遠藤周作、学者では河合隼雄、梅棹

忠夫)②カラオケ(好きな歌手は中島みゆき、RIGI)③山歩き(大学時代に「探検部」を仲間と創設、最近休止状態)▼最近ふと思ったこと

持病を快復すべく職場の仲間を誘って、北陸のとある湯治場に出かけた。途中、ご当地のスーパで、地元食材と地酒を買い込み、学生時代の下宿のような湯治部屋で自炊。ふうふうと湯豆腐を食べ、雪見酒を飲み交わした。湯治宿のスタッフにお話しをお聞きすると、「このごろは、若いひとが一週間から十日余り、比較的長い期間お泊まりされています」とのこと。「湯治」を広辞苑で引くと、温泉に浴して病気を治療すること。「場」とある。若者たちは、僕みたいに病気を治療しにきているのであろうか……あるいはストレスを抱える若者が増えてきているのか。それとも「湯治」が、現代若者のニュースタイルになってきているのであろうか……ふと気になった。

▼猫

わが家に猫が一匹いる。名前は「陸」。ちなみに初代の名前は「空」。二代目が「海」、そして今の「陸」。まるで自衛隊ファミリィ。猫は、ねむる、たべる、あそぶ、この三つの習性で、一日の大半をすくす。いっぽうで、この三つがままならないひらがら、今増えている。四苦八苦しなで、まるくなつて猫がしずかに眠っている。猫には、湯治場はいるまいな。

第17回農学部フォーラムの開催

第17回農学部フォーラム実行委員長

有 田 博 之

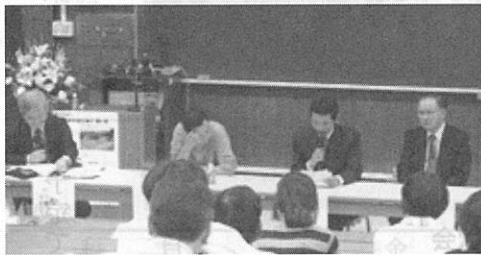
「東日本大震災後の「農と食」をテーマとして11月12日（土）に農学部198講義室で、学内外の100余名の参加を得て開催しました。例年と異なり農学部全体の企画とし、新潟大学災害・復興科学研究所の後援を受けました。フォーラムの開始に当たって新村学部長が挨拶し、フォーラムの趣旨説明と共に被災者への哀悼の辞を述べました。構成は①農業基盤被害の復旧、②原発災害の影響、③復興に向けた営農、④パネルディスカッションの4部構成としました。第1部・中越地域の農業農村の被害状況（三沢眞一・農）、清水の棚田における創造的復旧（吉川夏樹・農）、第2部・原発災害の農産物への影響（新潟県担当者）、原発災害と放射性物質（工藤久昭・理）、原発災害の農業への影響（野中昌法・農）、第3部・地震後の生産者の取り組み（伊藤亮司・農）。パネルディスカッションは、有田博之（農）がコーディネーターを

務め、講演者がパネリストとして登壇しました。新潟県は中越・中越沖両地震の経験もあることから、これら被災者も加わって議論されました。長野県北部地震における棚田の復旧と共に、福島原発の放射能被害への関心が強かったのも今回のフォーラムの特徴でした。今後も大衆として被災地に対する長期的な協力・対応が必要であることを確認して会を閉じました。

▲学部長挨拶



▶パネルディスカッション



国際交流の動き

農学部国際交流委員会委員長 山 田 宜 永

今年度における農学部の国際交流の主な動きをご報告いたします。

今年度も、海外の多くの大学から新潟大学農学部と国際交流のための往来がありました。まず、平成23年9月にタイ国コンケン大学のTritatanasrichai学長が来学されました。Tritatanasrichai学長は23年前に新潟大学大学院で農業機械学の分野において博士号を取得されており、日本語も流暢に話されます。今回の学長来学をきっかけとして、新潟大学とコンケン大学との間の大学間協定の締結という成果につながりました。11月には大学間協定の関係にあるトルコ国アンカラ大学のTuzge学長が農学部を訪問されました。アンカラ大学との学術的交流の展開に対して、農学部が大きな役割を果たしていることが確認されました。

さらに、平成23年10月にフランス国EAS (Ecole Supérieure d'Agriculture d'Angers) 大学（木南莉莉先生の担当）のZaudin博士、ベトナム国タイヌエン大学（渡邊剛志先生の担当）のDzung教授が、12月に中国寧夏大学（中野和弘先生の担当大

学）の謝副学長が、農学部を訪問されました。三方の訪問を受け、先方の大学の説明会や今後の学術的交流あるいは学生交流の協定締結の可能性についての打ち合わせが行われました。今年度中に、タイ国カセサート大学（長谷川英夫先生の担当）ト大学（長谷川英夫先生の担当）ト大学（長谷川英夫先生の担当）、スペイン国ナバラ大学（三ツ井敏明先生の担当）および中国内モンゴル農業大学（藤村忍先生の担当）からの代表者の訪問が予定されています。また、日本学術振興会の若手研究者招聘事業の支援を受け、タイ、ベトナム、マレーシア、インドネシアの大学・研究機関より14名の若手研究者を2週間から1か月の期間、農学部には招聘しました。農業生産拠点である新潟を中心としたアジア若手研究者の人材育成、交流の促進が期待されます。

11月には、恒例の農学部留学生と指導教員との交歓会が開催されました。留学生の家族や国際交流に貢献している日本人院生・学部生も含めて約70名が参加し、他学部も羨ましがる賑やかな夕食会となりました。昨年度に続き、第3回世界農学部学生会議IASSが平成24年2月にマ



◀アンカラ大学学長の来学



コンケン大学学長の来学

ロシア国プトラ大学で開催される予定です。ウイタカ・アンドリユー先生の引率のもと学部生12名が参加し、自国農業の紹介等について講演することになっています。

なお、来年度7月には、農学部主催による交流協定大学との第4回新潟大学農学部国際シンポジウムを中



農学部留学生と指導教員との交歓会

国の東北農業大学（ハルビン市）において開催する予定です。当シンポジウムの詳細については、現在検討中ではありますが、新潟大学からは農学部の学部生をはじめ、大学院生、教職員など大勢が参加する予定です。

2010年度新潟大学農学部同窓会 事業費決算報告 (平成22年5月1日～平成23年4月30日)

1. 収入の部

(円)

科目	予算	決算	増減	備考
基本収入からの繰入	4,500,000	4,500,000	0	
前年度繰越	23,762	23,762	0	
利子・雑収入	10,834	10,580	▲ 254	学部長祝儀 10,000(幹事会)、利息 580 合計 10,580
合計	4,534,596	4,534,342	▲ 254	

2. 支出の部

(円)

科目	予算	決算	増減	備考
1. 事務局費	500,000	506,680	6,680	全学交流会参加補助、消耗品、通信費、パソコン修理、謝金等
2. 会議費	450,000	451,720	1,720	常任幹事会開催経費、支部役員出席旅費等
3. 名簿情報維持管理費	60,000	52,500	▲ 7,500	名簿データメンテナンス
4. 卒業祝賀会費	700,000	0	▲ 700,000	震災により開催中止
5. 退職者記念品費	25,000	15,750	▲ 9,250	定年退職者(教員1)
6. 嵐丘庭維持費	0	0	0	校舎改築中
7. 「松涛」発行費	1,500,000	1,363,374	▲ 136,626	「松涛」「しおり」印刷、郵送等
8. 慶弔費	30,000	42,881	12,881	弔電、生花等
9. 支部活動助成費	350,000	280,000	▲ 70,000	7支部(6支部35,000円・首都圏支部70,000円)
10. 学文活動助成費	200,000	67,200	▲ 132,800	国際サテライト演習実施補助
11. 全学同窓会負担金費	377,000	375,105	▲ 1,895	分担金
12. ホームページ費	100,000	40,950	▲ 59,050	コンテンツメンテナンス
13. 出前講義旅費助成費	210,000	124,940	▲ 85,060	教員による高校等への出前授業等
14. 予備費	32,596	0	▲ 32,596	
合計	4,534,596	3,321,100	▲ 1,213,496	

3. 差引残高 (A - B) 1,213,242円 次年度への繰越金

2011年度新潟大学農学部同窓会 事業会計予算(平成23年5月1日～平成24年4月30日)

1. 収入の部 (円)

科 目	本年度予算	前年度決算	増 減	備 考
基本収入からの繰入	3,160,000	4,500,000	▲ 1,340,000	
前年度繰越	1,213,242	23,762	1,189,480	
利子・雑収入	10,580	10,580	0	利息 580、祝儀 10,000
合 計	4,383,822	4,534,342	▲ 150,520	

2. 支出の部 (円)

科 目	本年度予算	前年度決算	増 減	備 考
1. 事務局費	500,000	506,680	▲ 6,680	役員会・通信・電話料・謝金等
2. 会議費	450,000	451,720	▲ 1,720	常任幹事会旅費等
3. 名簿情報維持管理費	60,000	52,500	7,500	名簿情報メンテナンス等経費
4. 卒業祝賀会費	700,000	0	700,000	卒業祝賀会費補助
5. 退職者記念品費	35,000	15,750	19,250	定年退職者(教員2)
6. 嵐丘庭維持費	0	0	0	農学部改修工事中のため
7. 「松涛」発行費	1,400,000	1,363,374	36,626	「松涛」印刷、発送等文字拡大、4ページ増
8. 慶弔費	50,000	42,881	7,119	弔電代等
9. 支部活動助成費	350,000	280,000	70,000	支部活動助成(6支部@35,000、首都圏@70,000+α)
10. 学文活動助成費	100,000	67,200	32,800	農学部フォーラム等
11. 全学同窓会負担金費	376,000	375,105	895	分担金
12. ホームページ費	100,000	40,950	59,050	HPメンテナンス等経費
13. 出前講義旅費助成費	210,000	124,940	85,060	70,000円×3学科
14. 予備費	52,822	0	52,822	
合 計	4,383,822	3,321,100	1,062,722	

2010年度新潟大学農学部同窓会基金会計報告

1. 収入の部 (円)

科 目	金 額	備 考
繰越金	54,337,967	
基金収入(入会金)	4,688,690	@30,000円×158名-振替手数料
利子	93,994	
合 計	59,120,651	

2. 支出の部 (円)

科 目	金 額	備 考
事業費繰入	4,500,000	
国債購入替利子補填費	26,158	
合 計	4,526,158	

3. 次年度への繰越金 (円)

科 目	金 額
収入合計	59,120,651
支出合計	4,526,158
繰 越 金	54,594,493

注) 2011年度は、農学部前庭整備、A棟玄関ホール整備費用及び新潟県支部設立のための活動費が必要となった場合、基金から支出する。

学 部 だ よ り

黒井伊作先生を偲んで

前 田 秋 晴 (昭54農)

平成23年5月7日、恩師である黒井先生が88歳の天寿を全うされました。訃報に接し思い出の一片を述べさせていただきます。

私は34年前の昭和52年から先生の教えをいただきました。黒井先生と言えはまず石灰窒素によるブドウの休眠打破が思い返されます。でも実はこのこと以上に残っているのは「石灰窒素の土壌散布後に晩酌をやる」と、急性アルコール中毒のような症状が出るので気をつけるように」と言うアドバイスであります。先生と研究室で酒を酌み交わしながらの指導でしたから余計に説得力がありました。その後、私の自宅で親父にこの話をしたところ「自分にもその経験はある」と言う返事、先生を変な方向から見直したという思い出が今も鮮明です。

人柄は、誰でもが認める温厚さで、生意気と世間知らずの私でさえ怒られた記憶の無いことは、先生門下の学生に共通することであろうと思います。

在学時はもとより卒業後も(長文の)賀状を通じ、ご指導いただいた黒井先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます、偲ぶ言葉とさせていただきます。

ます。

合 掌

伊賀上郁夫先生を偲んで

早川 利郎 (昭33総農)

伊賀上郁夫先生(新潟大学名誉教授・応用生物化学科)におかれましては平成23年5月13日かねて療養中の新潟市内の病院で逝去されました。享年84歳でした。先生は愛媛県松山市のご出身で、九州帝国大学農学部農芸化学科をご卒業後昭和27年7月に本学に着任され、以来、助手、助教授、教授を歴任され平成5年3月に定年退職されるまで、41年間、本学の発展に尽力され多士済々の人材を社会に送り出されました。先生は日本一のコメ生産県を考えて、米の生化学的研究に取り組まれ、昭和33年11月「米でんぷんの合成酵素の研究」で新潟日報文化賞(産業部門)を受賞され、さらに昭和48年11月には「新潟県産米の品質向上に関する研究」で新潟県技術賞を受賞されております。

先生は各学部に分散している分析機器の有効活用を考えて分析センターを設置して、利便性を高めたいという信念で、設置に尽力されて、実現後は分析センター長を長く兼任されて、研究の発展に大きく貢献されました。

先生のご趣味のバラ栽培は、素晴らしく、5月から6月には庭一杯にバラが咲き、美しさと豊かな香りを漂わせておりました。冬は教室の年中行事のスキー旅行に参加され、蔵

王や石内丸山、妙高杉野沢、信州野沢温泉や梅池高原スキー場など同行させて頂きました。先生の思い出を懐かしみながら心よりご冥福をお祈り申し上げます。

合 掌

丸山幸平先生を偲んで

中田 勝彦 (昭45林)

丸山幸平先生(元新潟大学教授)におかれましては、平成二三年四月十四日に御逝去されました。享年八一歳でした。

先生は昭和二六年に新潟大学に奉職され、昭和四五年に論文「海抜高によるブナ天然林生産力の変化」により東京大学から農学博士の学位を授与され、昭和四九年には「苗場山ブナ原生林の乾物生産におよぼす高度の影響」により日本林学会賞を受賞、平成七年に林学科の教授として退官され、最終講義「ブナとつきあつて三十五年」では「本によらず、自然に学べ」と教えられました。ブナ林の生態学研究を展開し我が国ブナ研究の基礎を築きました。

退官後は海外約五十か国を旅行、国内は全県を車で走破され、旅行記録をスケッチに残されその個展を開催されました。また「越後新川まちおこしの会」の発起人・事務局長として御活躍されました。

先生の思い出は数限りなくありますが、山梨県に就職した林学科卒業生が組織する「越路会」がお招きした、信濃川源流をさかのぼる甲武信岳登山の際には教え子を熱く励まし

て下さいました。私事ですが、河渡の旧校舎を偲んで我家の庭に植えたナンキンハゼは一抱えほどにも成長しました。先生に習い造林学教室の同期生と今年米国のヨセミテ公園等をドライブしました。また十二月には造林教室苗場同窓会が苗場で開催されます。

丸山先生の魂の安らかなることをお祈り申し上げます。

新任教員紹介

農業生産科学科

助教 山城 秀昭



初冬の候、新潟大学五十嵐キャンパスの木々の紅葉も赤や黄色に染まり、様々な色が楽しめる季節になりました。

平成23年4月1日付にて米国ハワイ大学より赴任して参りました山城秀昭です。出身は広島県広島市ですが、これまで北海道、アフリカボツワナ国、仙台、ハワイなど転々として新潟に辿り着きました。

大学は、学生にとつて、専門知識や技術を学ぶ場に留まらず、それら専門性を身につけた上でどのように自己実現をしていくのか、言い換えれば、将来の職業選択や自身の生き方自体を深く思慮する貴重かつ重要な機会であると思えます。したがって、自身の畜産人としての倫理観の

一つでもある「畜産人のイロハ」、「イ」は命のイ(人は畜産動物の命の摂取により生かされており、家畜を飼育することは人の命を育むことである)、「ロ」は浪漫のロ(畜産には浪漫があり、畜産人はその浪漫に向かって知識と技術を屈指し努力しなければならぬ)、「ハ」は発展のハ(畜産は食糧供給だけでなく、土を育て、草を育て、また、地域の加工・流通産業、さらには研究分野にも発展する)の信念に基づき、家畜飼育・生産の基幹である生殖学の専門的な知識、思考力および技術にかかる講義と実習を展開し、畜産という無限の可能性を持つ分野の専門性の習得を通じて、学生一人一人が進むべき道を模索するような教育を実践したいと思っております。

他方、研究におきましては、未知な生物学的現象を解明する研究の興味深さや難しさを将来の畜産学や生命科学研究を担う学生に伝え、その分野の研究の発展に貢献できる人材を輩出できるよう尽力したく存じます。同時に、将来的には、世界の先端動物生殖学・発生工学の発展に道を切り開く研究を新潟大学農学部から発表することを目標として、本学の教育と研究の発展という両面に微力ながら真摯に取り組みでいきたいと考えております。

つきましては、本学農学部同窓生の諸先輩方の末永いご指導とご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

農業生産科学科

助教 藤本 龍



平成23年6月1日付にて着任してまいりました藤本龍(ふじもと りょう)です。出

身は兵庫県神戸市で、大学進学後は仙台で9年間、その後博士研究員として、静岡県三島市とオーストラリアのキャンベラでそれぞれ、2年半ずつ過ごしました。専門は植物育種学で、学位はアブラナ科植物の自家不和合性の研究で取得しました。その後は、モデル植物であるシロイヌナズナとその近縁種を用いて、エピジェネティクスの研究と同じくシロイヌナズナを用いて、雑種強勢の研究を行いました。着任後は、その現象が見いだされて100年以上たった現在においても、その分子機構が謎のままである雑種強勢について、雑種強勢が顕著に見られるハクサイやキャベツなどのアブラナ科植物を中心に研究を行ってまいります。その他にも、遺伝学なアプローチにより、農学的に重要な課題について、研究していきたいと思っております。今までに培った実績と経験を生かして、本学の教育、研究のより一層の発展に微力ながら貢献していきたいと考えています。ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

応用生物化学科

助教 仲野 千秋



平成二十三年七月一日付にて着任いたしました仲野千秋です。出身は新潟県長岡市で

す。本学大学院の自然科学研究科にて博士号を取得した後、東京大学大学院農学生命科学研究科にて特任研究員として働いてまいりました。専門は生物有機化学であり、これまで主に微生物由来の天然化合物の生合成に関する研究を行ってきました。近年、多くの生物のゲノム配列が明らかにされていることから、その情報を利用して、新規生合成酵素の取得および新規物質の探索を行っております。また、得られた生合成酵素と様々な基質との酵素反応を行うことにより、非天然型の有用物質の創製にも取り組んでいきたいと考えております。

本学の教育・研究のより一層の発展に微力ながら貢献していきたいと考えています。ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

生産環境科学科

准教授 鈴木 哲也



平成二十三年三月一日付にて着任いたしました。出身は東京都です。専門は、農業工学

であり、構造材料の損傷機構の解明と非破壊検査法の開発を行っていま

す。特に弾性波や電磁波を利用した非破壊検査技術の開発に注力しています。

前任校で培った実績と経験を生かして、本学の農学教育・研究に微力ながら貢献していきたいと考えています。宜しくご指導のほどお願い申し上げます。

生産環境科学科

准教授 吉川 夏樹



平成二十三年十月一日付にて着任いたしました。専門は農業土木学で、特に灌漑排水

工学、農業水利学を中心に研究・教育活動を行ってきました。農学部着任前は新潟大学災害・復興科学研究所(旧災害復興科学センター)に、約5年半特任助教として在籍しておりましたが、農学部に着任してからは、生産環境科学科の教員の皆さんとも一緒に活動させていただいております。

災害・復興科学研究所在籍時には、専門である「水」とは多少分野が異なりますが、中越地震で被災を受けた中山間地域の経済基盤である農地の復旧に対する技術的課題の解決を念頭に置いた研究を行ってきました。その成果の一つに「GISを用いた傾斜地耕地の区画整理手法の構築」があります。この手法は、現在、中越地震被災地以外の県内の中山間地域にも適用されており、今後の農村基盤整備での活用が期待されています。同時に、水による災害を軽減

する取組「田んぼダム」の技術的研究も行っております。こうした、「新潟発の技術」を生み出し、全国あるいは全世界に波及させるお手伝いができれば幸いです。

今後、農学部同窓会の皆様には何かとお世話になる機会があると思いますが、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

農学部附属フィールド科学研究センター

助教 阿部 晴恵



平成23年4月に農学部附属フィールド科学研究センターに着任いたしました。

阿部と申します。佐渡ステーションにおいて、主に演習林の共同利用に関わる業務を担当いたします。

前職は、東北大学大学院農学研究科において、産学官連携研究員として環境省委託事業「絶滅危惧植物の全個体ジェノタイプングに基づく生物多様性保全に関する研究」に従事してまいりました。また、2000年に噴火した伊豆諸島三宅島において「噴火後の植生回復に関する研究」を続けています。専門は森林生態学・島嶼生物学・保全遺伝学です。遺伝情報を活用して、動植物間の相互作用系を解析しています。

これまでの経験を活かし、演習林を活用しながら、生態系の適応力を考慮した包括的な森林管理政策を目指す人材育成を行いたいと考えています。どうぞよろしくお願い申し上げます。

農学部 農学部の動向

学会賞の受賞

佐藤努准教授 (応用生物化学科) 日本農芸化学会奨励賞 (平成24年3月)

「セスクアテルペン (C₃₅テルペン) の探索と生合成に関する研究」 仲野千秋助教 (応用生物化学科) 香料・テルペンおよび精油化学に関する討論会ベストプレゼンテーション賞 (平成23年11月)

「*Streptomyces griseus* 由来の新規セスキテルペン環化酵素の機能解析」 七夕 (伊藤) 小百合 (応用生物化学科平成15年卒)

日本土壤肥料学会奨励賞 (平成23年8月)

ダイズの根粒超着生変異系統に関する研究

中野和弘教授 (生産環境科学科) 農業情報学会 学会賞 (論文賞) 「感水紙の薬液付着液斑被覆面積率を簡易かつ高精度に測定する画像処理ソフトウェアの開発」

大橋慎太郎助教 (大学院自然科学研究科) 農業施設学会賞 奨励賞 「積雪寒冷地域のハウス栽培におけるローカルエネルギー利用に関する研究」

学会等の開催

第17回生物関連高圧研究会シンポジウム (平成23年9月21日～23日、新潟大学 学駅南キャンパス「ときめいと」)

大会委員長・会長 西海理之准教授

農業情報学会全国大会 平成23年5月

会場 東京大学農学部

大会委員長 中野和弘教授

実行委員幹事 大橋慎太郎助教

学位取得

農業生産科学科 小林寿美 博士 (農学) (平成23年3月)

応用生物化学科 本間利光 博士 (農学) (平成23年3月)

生産環境科学科 石田真也 博士 (学術) (平成23年9月)

退職

長年、当農学部のため多大な貢献をされた生産環境科学科教授有田博之先生と同学科教授三沢眞一教授が平成24年3月31日に定年退職されます。

長年にわたり積み重ねてこられたご功績に心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

教員訃報

丸山幸平 元教授 (森林環境管理学) が平成23年4月14日ご逝去。

黒井伊作 元教授 (園芸学) が平

成23年5月7日ご逝去。

伊賀上郁夫 名誉教授 (生物機能開発学) が平成23年5月13日ご逝去。

加瀬良明 元助教 (農林経済学) が平成23年6月11日ご逝去。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

会 員 訃 報

次の会員の訃報が事務局に届けられています。

伊藤 邦男 (昭23・3農専・農)

白石 義行 (昭28・3農学)

大内 在絵 (平16・3家畜)

加藤 郁三 (昭24・3農専・農芸化)

内藤 重男 (昭24・3農専・農芸化)

原 次郎 (昭34・3林学)

鈴木 重也 (昭41・3農芸化)

山本 武雄 (昭37・3農学)

関 哲夫 (昭24・3農専・農)

中曾根正一 (昭50・3畜産)

斉藤 恒意 (昭24・3農専・農芸化)

橋本 一彦 (昭25・3農専・林)

浅妻 軍治 (昭30・3総農)

高柳 英夫 (昭24・3農専・農芸化)

田原 敬治 (昭23・3農専・農)

南雲 順一 (昭45・3農工)

川見 佳一 (昭51・3農工)

本宮 富二 (昭29・3農学)

高見 弥 (昭29・3農学)

大友 捷一 (昭39・3農学)

謹んでご冥福をお祈りいたします。



編集後記

「3・11」千年に一度の大地震と大津波をもたらした東日本大震災、そして起きてはならなかった原発事故。松涛に寄せられた被災地からの復旧・復興の寄稿や福島県支部からのたよりには、この災害への苦悩と悲しみと怒り、そして明日へ託す希望の思いが綴られています。松涛は、平成16年の中越そして19年の中越沖地震を風化させてはならないと特集を組んできました。今後も「3・11」の震災後をずっと記憶にとどめていく編集に努めたいと考えております。岩手、福島、宮城3県の同窓生は、約380人にのぼります。皆様からの近況報告や復興・復旧への取組状況をお待ちしております。多くの同窓生からのおたよりが頂ければ幸いです。(HW)

